

もっと知りたい
ふるさと

門付けと巡礼の話

宮原 英夫

沖浦和光氏はその著者「旅芸人のいた風景」の中で「私は一九二七（昭和二年）の元旦生れだが、その一週間前までは大正時代だった。したがって私たちが、いわゆる「昭和世代」のトップバッターということになる。（略）さてこの小論は、実際にこの目で見えた「旅芸人」の回想記から始まる。おそらく昭和前期に生まれた私たちが、彼らの姿を表現した最後の世代だろう」と述べています。

私は沖浦氏より一廻り下の世代ですが、昭和二十年代の前半には、各地を歩きながら門付けなどして生計を立てていた人々を見る事ができました。こうした人々について「六十年も前のことなので記憶の定かでないところもありますが一、二、三記してみたいと思います。」

私の住んでいる所は、上山田の羽場という地区です。そ

こには山伏塚と呼ばれている古墳があります。東側には小字甚右衛門の碑や僧修順の重塚の碑があり、上部は墓地で西側には山伏塚の名称の由来となった山伏西宝院の記念碑もあります。数十基の墓碑は上部の周辺にあり、中央部が小さな空地になっていたので子供たちの遊び場でした。

昭和二十五年の春先のある日、いつものように遊んでいると、山伏塚の北側の家の庭に中年の男の人が何か唄えながら入って来るのを見えました。五、六人の仲間と何だろうと行ってみると、長さ三十センチ程の小さな俵に紐をつけたものを持ち、「一つ転がしや千俵、二つ転がしや万俵」などと言いながら、家の中に俵を投げ込んで紐で引寄せていました。家の人が出て来てお捻りを渡すと、何ごとかを唄った後に「おめでどうござい」と言っ行って行きました。これは「俵転がし」と呼ばれる祝ぎごとをする門付けであったようです。

昭和二十一年一月、祖父の葬儀の翌日に家族、親戚で寺参りに出かけようとしていた時、四ツ竹を鳴らしながら軒先に立つた男の人がありました。誰かが

「祭文が来たようだ」と言いました。父が「親父は浪花節が好きだったから供養に願ってもらうか」と言っその人に頼みました。

私にはその内容は何りませんでした。大人たちは「童歌だ」とか「お里・沢市だ」と言っていました。今にして思えば、一世を風靡した浪花亭桃太郎の「妻は夫をいたわりつ夫は妻に似たいつつ」で知られる「童歌童歌」であったようです。詠り終えた「祭文語り」に米やお捻りを渡していました。寺参りの後、墓地で線香を手向けようとしたところ、線香を持って来るはずの人が、祭文に聞きはれて忘れてしまい、取りに帰るといっておまけまでありました。

これは父のメモがあるので昭和二十二年六月十日の午後ということが判ります。この日は休日でも家におりました。昼めしが終り食休みをしている時に、真白な髪を伸ばし白衣を纏った小僧でやせた老人が、長い杖をついてやって来ました。この人は徳島出身の廻国巡礼者「父のメモには阿波国那賀郡の人石原秀昌とある」で、曹満寺へ向う途中迷い込んだというのでした。休んでいきな

さいと言ひ、昼食を出し、帰りに米やお捻りを渡してました。

巡礼者は白紙を求め及から矢立てを出して何かを書いて父に渡し、読経をしてから去って行きました。紙には「よしの川そのみをかみと たづねればむぐらのしずく 長のしたる」という和歌が記してあると父が読んでくれました。今見ると「随自平」という陶防印、「州南かく」の下に「石原」と「州南」の落款が捺されています。

なお「よしの川云々」の和歌は、作者不明ですが古くより有名で、歌句に異同はありますが「信長公記」、「可笑話」、「醒醉笑」などに引用されています。「吉野川」は和歌山県の紀ノ川に注ぐものと徳島県を流れるものとが知られています。石原氏は徳島の人なので、自作のように利用したのかも知れません。

私の小学生の頃には、門付け芸人や巡礼以外にも、「真直し」や「掛掛屋」などの人々も廻つて来たものです。それも、昭和三十年代の高度経済成長期になると、その姿を見る事ができなくなりました。今はただ、懐かしく思い出されるばかりです。



写真① 「恋しの湯」伝説碑

戸倉上山田温泉の玄関口は昔も今も大正橋である。名のとおり大正ロマンを彷彿させる橋である。「画家竹久夢二（一八八四〜一九三四）の「千曲小唄」のイメージが歩道バルコニーに組み込まれている。両側の歩道には赤い小石が埋められ、九九個ある。左岸の橋詰には「恋しの湯」伝説が碑で紹介されている。（写真①）このお話の主人公の娘お政は

もっと知りたいふるさと

「恋しの湯」の

赤い小石は…

竹内 長生

ついに百個目の赤い石を見つけて、恋しい米吉と結ばれた。この石は出湯の庭にあった。これが温泉のもとで、小石（恋しの湯といわれるようになった。伝説にうたわれた百個目の赤い石は、なんと千曲市役所戸倉庁舎の入り口に存する。市民の幸せを願っているという。戸倉温泉の開祖は坂井量之助（一八五九〜一九〇五）である。戸倉中町の坂井家当主で、戸倉温泉の千曲川左岸堤防上に大きな顕彰碑がある。戸倉温泉の中興の祖と称されるのが畑山国三郎（一八七五〜一九三一）である。国三郎は上水内郡牟礼村の生れで、長野でポンプの製造販売を業としていた。早逝した量之助の坂井家を助けた藤井氏（長野・よしのや酒造）に請われて戸倉温泉の再建に当たった。千曲川の洪水の被害から戸倉温泉を守るために土盛りや街割りをするすすめた。

温泉へ客をよぶため、信越本線戸倉駅まで乗合自動車ハイヤーを開設した。温泉街の入口には千歳橋をかけた。これらの事業により戸倉温泉は発展へ向った。国三郎の業績をたたえる頌徳碑も左岸堤防上に平成九年になって建立された。（写真②）



写真② 畑山国三郎翁 頌徳碑





修理工事完成

平成十八年度から二か年かけて行ってきた長野県宝「松田家住宅主屋」の修理工事が、この度完成いたしました。二月十三日の見学会には、二百名を超える市民のみならず、江戸時代の姿に修理された、一般の民家と異なった「神主さん」の家を見学されました。

千曲市では、県宝に指定された主屋ほか市指定文化財の付属建物を平成十六年十二月、所有者の松田孝弘様から寄贈を受けたのを機会に、平成十七年度から平成二十五年度の九年間をかけて修理し、公開する「松田家資料保存整備事業」を行っています。

この事業は、江戸時代の後期、明治期の建物群、約二千坪の屋敷内に中世の居館跡をしのばせる堀や土塁（土を土手状に高さ二メートルほど盛り上げた防



県宝「松田家住宅主屋」

御施設)、さらに一万数千点にのぼる古文書、書画、什器等の資料の散逸や滅失を防ぎ、その保存と整備を行い、広く活用を図るものです。

整備にあたっては、八幡地区のまちづくりの拠点として、また千曲市の観光拠点となるよう整備を行う計画です。

県宝「松田家住宅主屋」

主屋は、平成十六年十一月二十二日付けで長野県宝に指定されました。

主屋の建築年代は不明ですが、建築部材の仕上げや建物の特徴から江戸時代後期（十八世紀代）の建築と推定されています。弘化四年（一八四七）の善光寺地震で傾き建て直したと伝えられていることから、一九世紀前期に現在のように改造されたものと考えられます。

建物の特徴として、間口十二間五尺、奥行四間の細長い木造平屋建、茅葺の建物で、間口中央から齋館に向かって凸字形に突き出した平面形となっています。

主屋の平面は、前後に五室が並ぶ形式で、土間が表から裏まで通る一般の民家とは異なった間取りとなっています。天井が低く、差鴨居や長押を用いない武家住宅のような趣があります。

南側の突

出部は書斎のような造りで、一面にある湯殿は、神事の時に潔斎の場に使われたところで、神主の家としての特徴が表われています。

主屋は、平面形式、内装等の各種に特徴ある姿がみられる神主の住宅で、県内屈指の屋敷構えを持つ住宅として、長野県の建築の歴史を知る上で貴重な民家建築です。（以上、指定調書より）



今後の整備事業

平成二十年度は、主屋に引続き「新座敷」と呼ばれている県知事などの貴賓者の接待に使われた建物の修理工事を計画しています。

整備事業の完成には、まだ期間を要しますが市教育委員会では、今後も見学会を開催していく予定です。

市教育委員会 矢島宏雄



桑原の宿しゆくの原はらの、 西行法師の袈裟けさかけの松

むかしむかし、それはとおいむかしのこと。

桑原にまだ町割もなく、それでも五、六軒ぼちぼちと善光寺参りの旅人なぞ、留めていた頃のこと、都より偉い法師(実は西行法師)が、この地を通りかかったそう。

何でもむかしの事だから、真っ暗な夜になると色々な獣が蠢いて、獣道が宿の外れに沢山出来る程だった。

一番悪い「おちよぼ」と云うきつねは、人々を騙したり村の畑や人家まで入り込み悪戯いたづら三昧さんまいしていて、村では大変困っていたそう。

桑原の宿場の外れに、それはそれは大きな松があつて、旅人が休んだり、次の宿へ行くときの目安として大切にされていた。

そんな時都から来られた西行法師が、丁度そこでお休みになられていた。

それを見つけた、きつねの「おちよぼ」は綺麗な女性に化けて近づいた、法師は日本中を布教されていた方なので、女性が純情な人でない！と直ぐに感じ知らん顔して澄まし込んでいた。

女の人はそれとも知らずに近づい

て西行法師の旅を労ったり、世間話を持ちかけて気を引く様上手に話しかけてきた。

色々の話の後、話が途切れる頃を見計らつて、法師は女に「私と歌比べをしませんか」と、さらりと云つた「私に貴方が勝つたら、都で流行っているこの袈裟を上げましょう」と、金銀で華やかに刺繍してある袈裟を、松の小枝にかけた。

あたりの松の緑に映えて袈裟は、それはそれは美しく、「おちよぼ」は堪らなく欲しくなつた。

西行法師のタイムング良さにつられてつい歌比べの返事をしてしまった女は、法師からどうぞと云つてしまった。

法師は、短冊に「桑原の宿しゆくの原はら、松の影より眺むれば、獣のかよう道ぞあきらか」と読まれた。

女は法師が私をきつねである事をもう知っていると悟り、自分の歌は読まずに、懐ろより美しい「ほうしようの玉」を出して、さめざめと自分のしてきた今迄の事を振り返り「これからは旅人を騙したり、近隣人々に迷惑をかけたりましたしません」と、女はきつねの「おちよぼ」に帰つて

懺悔した。

西行法師は、この「ほうしようの玉」は貴方が持っていたほうが似合うと云つて、受け取るうとしなかつた。

それよりこの宿の松を誰云うとなく、西行の袈裟かけの松と呼ぶ様になつた。

今は、もう松も無く「宿の原」と云う、大勢の人々の墓地になっている。

桑原伝説より
堀内 崇





北国街道矢代宿

屋代宿は慶長一六年の「伝馬宿書出」(柿崎文書)により成立したが、やや後世の寛文(一六六一〜七三年)期において「矢代宿」と改まっている。道筋も初期と中・後期では異なり、戸倉宿からの入口は初期には現仲(中)町道祖神碑の地点で本陣の東側を通り、出口の千曲川の渡過地は現篠ノ井橋の下流で、丹波島宿へと連なっていたが、後には同橋の軻良根古社近傍へと移転したことである。なお



矢代本陣のようす
『諸国道中商人鑑』(文政8年)より

「北国街道」は正式には「北国脇往還」と呼ばれており、五街道の一つの中(仙)山道とまた北陸道とを結んでいた道で通常物資の輸送とともに、佐渡の金銀の輸送及び各藩の参勤交代の通路と位置づけられた。中期以降しかし興隆してきていた善光寺の参詣路として「下方」(京都)「上方」の対語)に利用されてきていた。矢代宿は俗称「雨降街道」(松代道)「近代の「谷街道」の分岐点でもあった。

宿泊施設には寛永一二年に参勤交代が制度化されると、旅籠屋の筆頭柿崎源左衛門景晴の宿泊所は「本陣」となり、その後代々通称の源左衛門を継承し、景晴の孫の分家が「脇本陣」を構成していた。矢代宿には中流向の「旅籠」や、下流向きの木賃宿も存在して営業に当たっていた。このうち木賃宿には飲食を持参するが、宿泊具のみを提供していた低級の宿泊所であった。江戸末期の元治二年における加賀藩

主の宿泊においては、矢代一帯には一五八宿泊所の足軽・小者を含む二一九五人を当矢代宿で収容していた。この宿泊所には法花寺を始め大宮司宅まで及び、一般宅も多数が含んでの規模であった。

住民のうち、一定の石高のある耕地を所有していた本百姓は軒割で人馬を出し「伝馬」を勤めた。常備人馬は二五人、二五疋とされていた。うち本町組(現高見坂以南)が、新町組(同以北)とで、月半分にあたる各十五日あて交代に勤めた。伝馬継立は当時の公文書の搬送を、丹波宿への三里、松代への二里八丁の道のりを継立た。また「駄賃」には本馬・乗掛・軽尻の別があつて郵送料には御定賃銭と相對賃銭があり、後者は客との相談で決めた。助郷と加助郷の制では近隣農家の粟佐・森・倉科・生萱・土口の諸村の出勤で、適宜奉仕させられていた。

(中島 正利)

公民館報
ちくま

楽しく読書 文化学

本館公民館報は、さまざまなテーマをとりあげて読者のみなさまに読んでいただき、また読者のみなさまからのご意見やご感想もお待ちしております。また、読者のみなさまからのご意見やご感想もお待ちしております。

発行所：ちくま公民館報編集委員会
〒187-0001 長野県上田市上野中町1-1-1
電話：026-222-1111
FAX：026-222-1112
Eメール：chikuma@city.ujm.lg.jp

もっと知りたいふるさと

⑦ 智識寺「お観音さん」



「まちの話題四号欄で紹介した上山田地区「お観音さんのお祭り」について、「もっと知りたい」という声におこたえます。

智識寺十一面観音は通称「お観音さん」と呼ばれています。このお観音さんは、開運出世観音として崇敬篤く信者も多い。境内の石の垣根からは、東京を中心とした関東方面の信者の多いこともうかがえる。恒例の春のお祭りは、桜花爛漫の四月十七日、開運出世を願う若男女の参拝が続く。夏には紫陽花が朝露に輝き、錦織に彩られる秋、枯れ葉にうずもれ静寂の中で春を持つ杜。四季折々の豊かな趣と風情は、参詣者の心を捉えて離さない。

このお観音さんは、上山田の八坂地籍(釜屋)(主要地方道大町麻績インター千曲線沿い)の交通の便がよいところに鎮座されている。

通称四十八曲峠の上り口にあり、こんもりとした杜の入り口には、大きな「わらじ」が飾られた仁王門が道路に面して見られる。仁王門(阿像呼像)をくぐると真正面に大御堂が見える。順を追ってご案内をします。

仁王門をくぐり右側に事務所ややまむと左側に小さなお堂がある。右側一段下がったところに庫裡がある。庫裡の周りには、紫陽花が植えられ、「智識の杜公園」として親しまれている。また、納涼には最適なところでもあります。

智識寺は藤原前期、即ち一千年の昔、ソネ(曾根・簡根)堂：冠着山の東の麓に開山と推定されている。その後、この智識寺は古座に遷した。

ここからさらに、中世の山田氏が、現在地(釜屋)に遷し、氏寺とした。

古仏十一面観世音立像は、総丈壹丈六寸、一木彫成である。全像が甚だしく細長く撫髯なところが、



ちなみに、大御堂と十一面観世音立像は、国指定重要文化財に指定されている。いつ訪れてもいいお寺のひとつである。

参考文献 上山田町史
文責 藤原 賢司

公民館報
ちくま

成人式の記念に!!
「思い出のタイムカプセル(上道田小学校)」

1月15日(土)午後5時30分より、上道田小学校(上道田小学校)にて、成人式を記念して、思い出のタイムカプセル(上道田小学校)を開催しました。当日は、上道田小学校の児童が、思い出のタイムカプセルを制作し、その思い出を語り合いました。

〒270-0101 千葉県市川市上道田 電話 0476-321-1111
〒270-0101 千葉県市川市上道田 電話 0476-321-1111
E-mail: info@city-shikuma.jp

もっと知りたいふるさと

8

道標が誘う
八幡街道

千曲市八幡の武水別神社（お八幡さん）へお参りする人々が往き交った、わずか六キロメートル程の街道がある。北国街道下戸倉宿今井町から上徳間―千本柳―小船山―中を過って八幡へ至る八幡街道である。石造の道しるべが案内してくれる鄙びた街道だ。千曲川右岸で石造文化財が数多くみられ、北国街道と善光寺西街道を短く結ぶ役目も果たしていた。

今井町の国道十八号線わきに起点の道標が立っている。正面には「左おはすてやはた道」、裏面には「南無阿彌陀 佛」と、側面には「明和元甲 申八月星宿」とあり、一七六四年の建立である。（写真①）ここから八幡小路と呼ばれる道を西北へ向い、上徳間を過ぎて中徳間に至る。二十三夜塔や宗匠宮人又三郎翁の句碑を読み旧興隆寺跡に立つ。堤防直下の興隆寺跡は、昭和三十三年羽尾の明徳寺に併合されて小さな堂のみを残している。街道はこの先で千曲川の堤防工事により消失し途切れている。中徳間から北上すると千本柳



① 今井町の道標

である。両地域の境付近千本柳の上川原地蔵に、旧黒彦村の赤石の道標が安置されている。正面には「右いなりやま左やはた是より一里三町四十五間」、裏面には「黒彦村」とある。（写真②）八幡道と橋野山道の分岐点で見事な道案内である。この道標は忘れられ、棄てられる寸前を地元の有志により安置されたものという。



② 上川原の道標

水田の中を進んだ街道は、地元で「熊の権限」と呼んでいる石仏や黒彦神社境内の石碑・諸神をはるかに仰ぐ。さらに近くには寺小屋師匠であった米沢治因翁筆塚がみられる。その先、

往時「町」と呼ばれて栄えたという辺りを過ぎて甲組作業所前に入る。ここに千本柳中組の道祖神が立つ。道祖神右下に「右やはたみち」の道案内が刻まれている。北川原道標という。（写真③）この地は往時あったという須坂三島への「三島の渡し」方面の分岐と考えられ、そのための案内であろう。



③ 北川原の道標

千本柳の北方は小船山である。小船山の清水地区にも、かつては店があつた由である。その先、名峰冠着山を西に望む地に大きな句碑がみられる。（写真④）「雲理無き月遠き」こ路能か、「三可那」（曇りなき月を心の鏡かな）梅峯庵龜翁 本名野上七郎の句である。野上七郎は天保九（一八三八）年小船山に生れ、俳人として知られる。書画・花道・折形や生活一般の指導者で、五加尋常小学校中分教場の教師も勤めた。



④ 小船山の道標

地区西側の土手に、往時の街道の姿が残されている。これを過ぎて堤防上がる。ここに教基の水天宮と馬頭観世音碑が安置されている。（写真⑤）水防と旅の安全を祈ったものである。街道はここから千曲川の河原へ下り、「中村の渡し」で八幡へ渡った。現在は下流百メートルのところに、すばらしい平和橋が架けられ交通の要衝となっている。



⑤ 中区堤防上の水天宮

参考文献 戸倉町の文化財（石造文化財編）戸倉町教育委員会 竹内 長生

もっと知りたいふるさと

9

新名所

千曲高原の
ホタルの里



八幡の大池を中心とした千曲高原の更級川源流近くで、平成十八年六月二十七日に三〇〇匹ものゲンジボタルが飛び交い人々を驚かせたことがあります。そこから「千曲高原のホタルの里」と呼ばれるようになったのです。

左図のように更級川の源流地である大池下池の周囲は平成七、八年頃に千曲高原の保養地として整備が行われました。ホタルの里はそのやすらぎ広場の一角にあつて

更級溪谷に沿った遊歩道の周辺です。

六月中旬から七月初旬の夕暮れに訪れた人には駐車と同時にホタルが遊歩道へと案内してくれます。ホタルの光に誘われ坂道を一五〇ほど歩くと「ほたる橋」に辿りつきます。そこでは田圃のホタル風景とは違い深山の野趣あふれるホタルが飛翔を披露してくれます。眼下十数メートルを流れる溪流の音がするあたりから、見上げれば左

岸に二十数メートルある杉木立の梢近くまでもホタルが舞い上がり、橋上の目線より下は広葉樹の葉や草が生い茂り、葉擦れの音がかすかに感じられるといった立体的・音楽的な舞台背景でのホタルの乱舞には魅了されます。そして人工の光源が一切入らない自然の夕暮れ時にはホタルの優美な光どほ際立つて映えます。

更に、ホタルが地上に現れ、空に舞い上がる直前に出会った人は幸運です。岸辺の木や草の上で止まり、空に舞立ちの準備をしているホタルは、いつせいに四秒間隔で同時明滅を繰り返して、谷川のたたずまいを舞やかに浮かび上がらせては消え、又映しだします。かすかな風のそよぎを感じたとき、心安らぐ幸せを味わえるのです。

このホタルの里は素晴らしいのですが毎年ホタルの大発生はない



更級川溪谷



ほたる橋

ホタル・黒メダカ委員会
青木 亨

もっと知りたいふるさと

10

千曲市指定史跡 塚穴古墳



玄室(注1)から狭道(注2)

塚穴古墳は、稲荷山登山の標高五一〇メートル、通称「陣ヶ窪」と呼ばれている山腹にある古墳で、篠山から東南東に伸びた支脈の突端近くにありま

す。また、塚穴古墳の北側には、越前軍古墳があり、岡古墳とも稲荷山・桑原地区を眼下に、南西側に聖山・冠着山を望み、東側に千曲川を見下ろす景勝の地にありま

す。塚穴古墳は山腹の小さなテラスの先端に築造された円墳で、墳丘の裾が一部削り取られていますが、大部分は当初の墳丘を残しています。墳丘は実測の結果直径一五メートル、高さは谷側から三メートル、山側から約一メートルです。内部構造は、真南に向けて開口する横穴式石室で、玄室は完全して

に横長の面の大石を据え、隙間を小石で塞いでいます。天井石は五枚で、玄室と羨道の間は西側から袖石を出し、さらにその上部に梁石を渡して、玄室を区画しています。



入り口

(注1)横穴式石室の納棺室 (注2)玄室への通路

森將軍塚古墳館 学芸係 小野 紀男

をもち送りしているのは、この地方特有のもので、塚穴古墳は、高所(山上)に築造された横穴式石室を持つ古墳で、出土品はありませんが、石室の形などから、六世紀後半(約千四百年前)〜七世紀代

(約千四百年前)にかけてのものと考えられます。市内で高所に横穴式石室を設けた古墳は坂山古墳(土口)、常盤古墳(土口)、大岩古墳(寂蒔)等がありますが、塚穴古墳は羨道の一部を破壊しているだけに、古墳も石室もよく残されています。



奥壁

もっと知りたいふるさと

② 須須岐水神社



安永一〇年（一七八二）における当神社所有の文書に、竹田刑部亮神主・村山次左衛門などの七人の連署で、松代藩への提出文書に、当社は信州埴科郡産土神の総社にて、古来における勧請年月は不明に御座候得ども、往古の勧請にて須須岐水神社の目古山王宮、また、波布離山王宮とも称し奉っていた。

明治一二年の長野県の調査報告書「埴科郡神社明細帳」では、奈良時代直前に推古天皇の白鳳（当年号は通常の書には未記載書もある）期では、当地において「祝神社」が設置されている。然るに天明元年（一八七二）には、松代町の神官が松代藩を背景に、祝神社の称を当地に譲渡を要請し、やむなく屋代はこの要請に屈した。

寛保二年（一七四二）に戊の満水が起きて、当地の灌漑水路がずたずたにされたので、新しい用水路の設定が模索され、千曲川の十夜河原を揚水口とした「屋代用水（堰）」の設定が生まれた。当用水は広範囲の耕地を潤した。具体的灌漑には、松代領では上徳間・内川・千本柳・中（後の小船山村を含む）・粟佐・屋代・雨宮・森・倉科・生堂・土口の一村、幕府領では京蒔・御物師屋・打沢・桜堂・小島・枕瀬下・新田の七村に及び、両者の総計一八村に灌漑水の提供、現須須岐水神社は当地区の水神の地位を確立した。

寛保二年（一七四二）に戊の満水が起きて、当地の灌漑水路がずたずたにされたので、新しい用水路の設定が模索され、千曲川の十夜河原を揚水口とした「屋代用水（堰）」の設定が生まれた。当用水は広範囲の耕地を潤した。具体的灌漑には、松代領では上徳間・内川・千本柳・中（後の小船山村を含む）・粟佐・屋代・雨宮・森・倉科・生堂・土口の一村、幕府領では京蒔・御物師屋・打沢・桜堂・小島・枕瀬下・新田の七村に及び、両者の総計一八村に灌漑水の提供、現須須岐水神社は当地区の水神の地位を確立した。

は善光寺平の南部用水環として、重要な耕作上の役割の任務を担ったのであった。神輿は平安時代の前の貞観五年（八六三）には奉納されていたと伝承があるほどの古い時代に生成した歴史的な神輿であった。神輿の重量は三百貫もあったといわれるが、この重い神輿をかついで、ともかく雨宮の唐崎社まで明治前に往復した。神輿は「わっしよい、わっしよい」ではなく、「ゆいとう、ゆいとう」の掛声でかついだ。これは重い神輿で走った当時の「唯遠、唯遠」の名残りからきた掛声と思う。

「一つ物」は古代の屋代領主の代行者の、当社への参詣行事であった。これには武者行列が伴って独特の屋代の風情をかもしている。

近年道路の拡幅にともない玉垣が改修され、その後新拝殿建設を中心とする境内整備工事が実施された。

この工事は寄付金四、六四七万円に基金三、一九四万円を加えて七、八四一円で執行され、平成十九年四月二十九日完成竣工式が挙行された。当社の祭りには定例の春秋の例大祭や、七月三十一日の茅の輪祭りも夏の風物詩として定着している。



一つ物（昭和30年）

屋代 中島 正利

もっと知りたい
ふるさと

12

あま おう じ じん じや
天皇子神社

寂蒔の氏神である天皇子神社は、近村にたくい種なげやきの大木四本にかこまれた社殿で、六百余戸の氏子の崇敬の中心となっている神社です。

当社の御祭神は、第十一代垂仁天皇の第十四王子鳥取の王子と言われた「伊登志和気命」であり、境内はこの地にてお亡くなりになられた命の御陵墓でもあります。

その斎場に「正哉吾勝勝速日天忍穗耳命」と併せてお祀り申し上げ、古くは「王子の宮」「王子神社」「王子大明神」とも称され



ておりました。

神社の中には定紋を持たない神社もあるようですが、当社は文政十年（一八二七）に天皇子神社の社号を受け、菊の紋章を使用しています。

明治初年に春秋の例祭のほか「王子守祭」が復活し、三十年代全区の大祭として毎年王子守が選ばれ、各地区からわたり物が出される等、格式の高い盛大な祭りが行われました。しかし、明治末期に至り王子守祭は不況や社会情勢の変化によって中止され現在に至っています。在りし日の大祭の名残として秋の例祭の行列の中に「御陵祭」と書かれた御旗が加わり往時が偲ばれます。

氏子が寄せる崇敬の念は、厭々と受け継がれていくとともに千古の歴史を物語るけやきの巨木は、如実に古社の風を呈しています。この他、神社の境内には次の四つの末社が祀られています。

(一) 秋葉社

本社殿に向かつて左にある石塔です。秋葉大権現と称し、宮坂小太郎氏の屋敷にあった小社を安永三年（一七七四）に火防の神として境内に移したものです。毎年三月二十日嚴肅に祭典が行われています。

(二) 天神社

神社右側にある石造の小社で、石柱の上に安置されています。かつては寂蒔の小字入淀地区の天神山にあった小社を、文政七年（一八二四）神社の境内に移したものです。この入淀地区は、当時千曲川がたびたび大洪水になり大きな被害を受けたので、天神社を水防神として祀られたのではないかと言われています。

(三) 鹿島神社

境内の北東の隅にある石造流れ造りの小社で、自然石の上に安置されています。

弘化四年（一八四七）に普光寺大地震が起こり、北領全体が大きな被害を受けました。当区



は被害が軽微でしたが、大天災を信仰によって乗り越えようとした願いから祀られたものです。

(四) 養蚕大神社

養蚕は幕末頃から盛んになり、明治・大正・昭和と飛躍的に盛んになった産業です。当区においても蚕様が生活の中心であり、養蚕なくして経済が成立しない時代でした。

明治初年には木造の養蚕社があったと思われませんが、大正十三年には石造の養蚕社が再建され、鳥居まで建立されて養蚕大神社になりました。

寂蒔 宮坂 正明



波閉科神社

波閉科神社は、延喜式内社の一古社で、上山田の城山の南麓、古大木繁る社に鎮座して、女沢川の沢北地区の氏子皆の崇敬を集めている。

祭神は、天照大神と豊受大神、日本武尊の三柱である。社記抄「延喜式内郷社波閉科社要覽」によると、「天照大神ハ日本武尊勳請シ玉フ」とある。西暦一〇〇〇年頃、日本武尊入信し、麻績から冠着山南麓を大鹿へ抜けて見晴らし、この地方をハベシナノ里と命名した。

和銅元年（七〇八）ハベシナ



越前道に郡発極設立、発極駅設置。神護景雲元年（七六七）この付近に波閉科神社が奉建された。嘉祥四年（八五二）ハベシナノ神社等正六位に叙せられたことが、延長五年（九二七）に公布した「延喜式神名帳」に記載されている。

応仁元年（一四六七）波閉科神社は今の地に移遷。この時代山田城（荒砥城）築城。天文二十三年（一五五三）山田城陥落。永祿二年（一五五九）この頃、波閉科神社兵火にかかり類焼した。天明二年（一七八二）二月三日、ハベシナノ神社こと百社大明神は波閉科神社と改称を許可された。文化十年（一八一三）本殿と拝殿を再建した。

拝殿横には、千曲市指定有形文化財（建築物）波閉科神社本殿の案内板が建っている。
案内板には「本殿は拝殿の裏奥にあり、覆屋の中に納められた、桁行三間（三・二四）梁間二間（二・一四）、

切妻造、平入の建物である。（中略）外側ぎの千木と懸掛が四本ずつ、堅魚木を五本載せた神明造の社殿である。（後文略）一拝殿には、隨身姿の二神の像が安置されている。明治九年（一八七六）時の政策で、地域各所にある諸神を村社等を集め末社として奉祀した。波閉科神社の末社は次の六社である。境内には六社の案内図板が建っている。拝殿の横から宇佐八幡社・住吉社・妻神社・天神社・金比羅社・稲荷社である。この他に、温泉地区で祀っている水天宮がある。又、この境内には氏神を祀る石祠が多数ある。

明治十二年（一八七九）に大鳥居が再建された。同十四年の「村書上帳」に「社地一町八反六畝二七歩。（中略）飛地境内一〇坪程が、沢北南端字水土地踏十字路の藩治時代の御判場の跡にある。そこには大きな一ノ鳥居が樹立され、道祖神が二体奉置されていた」とある。この飛地境内には、例祭日に五反織

祭礼（祭曆）は、一月三日元始祭、三月十九日折年祭、八月二十一日風鎮祭等が行われる。例祭は、近年になつてから秋分の日に行われている。太々御神楽や若者達が取締、屋台掛、相撲掛、花火掛、織掛、灯籠掛等諸掛を分担して氏子総出で神徳仰飲の大祭を行う。また、十一月二十三日には新嘗祭が行われている。



鎌原 賢司



14

更級の遺跡幅田・円光房と

縄文祭のはじまり

冠着山麓北斜面標高六五〇以上の林道切り通しから樺葉遺跡が昭和三十八年に発見された。同遺跡は縄文中期初頭五五〇〇年前、関東地方の五領ヶ台式の影響を受けた諏訪郡桑久保式と、中越地方剣野B式文化が北陸よりこの地で融合したと考えられる。千曲市では唯一貴重な遺跡である。彼らは堅果類などの「木さらしアク抜き」の加工技術を持ち、次の縄文中期中葉の水煙鍋・王冠・火炎土器を拝した勝坂式五〇〇年前の文化に継承される。これは雄沢川下流域の

幅田・円光房遺跡の動態を詳しく解明する上でも極めて重要である。

昭和三十八年、このテーマを解明する上から幅田遺跡の発掘調査が行われ、続いて昭和六十二年圃場整備に伴い、円光房遺跡の大発掘調査で両遺跡は一帯であることが確認された。残念ながら勝坂式土器は見つからず、文献に仙石地区と三島平B遺跡で九段地下から把手や破片が出土した記録がある。つまり、同時期に大規模な土石流等で勝坂式は埋没したのであろう。

四五〇〇年前頃、幅田・円光房に縄文中期後葉の加曾利E式の集落が定住し始める。更級の里古代体験パークの古代住居は円光房より出土した柄鏡形敷石住居址を移設し復元したものだ。資料館には土器・土偶・石器類等出土した品々が展示されている。



縄文中期後葉加曾利E式土器
円光房遺跡
[さらしの里歴史資料館提供]

縄文中期初頭土器
樺葉遺跡
[県立歴史資料館提供]

更級の里縄文祭の始まり

堅果類のアク抜き加工技術・魚類や動物肉の燻製技術は安定



立石(男模石)の配り(通り)初期縄文まつり後の遺構様式
[さらしの里歴史資料館提供]

した生活と人口増加につながった。当然ながら様々な疫病が発生する。これを鎮めるために呪術や再生術などの祭事を行ったようだ。最も特長的なのは、配石遺構・立石・埋設土器だ。幅田第一号配石遺構は変形土器の底部を抜き、逆さまに埋設して石皿で蓋をしてある。堯の中は胎児の胎盤が納められ、家族がその上を踏めば丈夫に育つ占いだらう。幅田第二号方形配石遺構の南端にある立石の備に同様の埋設土器がある。この中は死亡した幼児の遺体だらう。



縄文中期後葉幅田遺跡2号方形配石遺構

この遺構の中は、石器・土器・動物の骨・人骨(多分亡くなった幼児の骨)などが投げ込まれた。大きな焚き火をして天高く昇らせた「英霊の送り場」だ。しかも配石遺構南端の立石は先祖がたどって来た樺葉遺跡の方向を拝し、一辺は冠着山の峯に面し、英霊を送り再生を祈る。

戸倉史談会常任幹事
大橋 静雄

もっと知りたいふるさと

15

北国街道西往還
火打石茶屋

江戸時代「一に伊勢、二に高野、三に善光寺」と言われて善光寺信仰が各地に広まった。個人や「講」で上方から江戸からまた越後や北陸方面から善光寺を目指して信者が往来するようになった。その道は通称「善光寺道」と呼ばれた。

善光寺道の中でも一番遠い道標は岡山県の平賀市で「善光寺へ百五十五里」と書いてあるという。「一生に一度は



参れ善光寺」と極楽往生の折りを込めた旅人は年間十万人あったという。善光寺への道は北から南から東からと通じていたが南の中山道の洗馬で分かれて松本・会田・青柳・麻績・稲荷山・善光寺の街道を北国西往還と言ひ、またの名を「善光寺街道」と呼んだ。

洗馬から善光寺までは十三宿で道程は十九里半あってそのうち麻績・中原・桑原・稲荷山の間三里余りの道のりがある。この街道の麻績と中原の間にある峠を狼ヶ馬場峠と呼び、頂上には馬場池(聖湖)がある。この峠が開発されたのは戦国時代で慶長十年頃に幕府によって整備された。

この頃になると世の中が平穏になって旅を楽しむ人々が増えてこの峠を上り下りする旅人や馬で賑わった。この峠から十四・五丁中原方面に下ったところに火打石の地蔵があった。そこに茶屋があった。この峠付近は山中で道も険しく冬季雪中で遭難したり、あるいは強盗に襲われたりと旅人の事故も多くあって、松代藩でも憂慮して対策を考慮し

ていた。

その頃、地元三ヶ村(八幡村・郡村・志川村)でも治安の悪化について心を痛めていた。そして相談の結果、文化五年に各村一名、八幡村では諏訪氏・郡村では宮下氏・志川村では松崎氏の計三名の者を峠に常駐させて御林(藩の御用林)の管理と街道の安全取締りを願い出た。文化十一年六月になって、松代藩勘定奉行から田中村右衛門他一人、道橋奉行から春日左衛門、駒村喜藤太、小奉行八幡八、富左衛門、立会いで火打石地蔵に屋敷地と野菜畑合わせて三千坪を下付した。これが火打石茶屋の初めとなった。

この付近には今でも「三千坪」の地名が残っている。一人千坪宛て拝領した土地もその後、藩の役人の口利きもあって、二人の者に屋敷地として二回四方(百四十四坪)ずつと宇蔵平五千坪の内、五百坪を野菜畑として引き渡すなどした。せっかく藩から受領した千坪の土地もだんだん減ることとなってしまった。また当初の三人は茶屋家業は家



族に任せてもつばら御林管理取締まりをしていたが広い山林で不行き届きになるので、三郎右衛門を格別に火打石に住まわせて山林取り締まりを強化するように願い出ている。こうしてこの街道上り下りの人馬の往来も盛んとなって、最盛期には松島茶屋・大井茶屋など九軒となったが茶屋同士の軋轢や出入りがあり、文政三年十月「八幡村火打石新田茶屋稼き出入り内済証文」も残っている。

こうして賑わった街道や茶屋も明治三十三年篠ノ井線の開通と共に減って、最後まで残っていた松崎茶屋も昭和の初めに中原に下って火打石茶屋の歴史的使命も終わることとなった。

文化財調査員 宮澤 安夫

もっと知りたい
ふるさと

⑬ 稲荷山四神について

はじめに、江戸時代も中期以降になると「お伊勢参り・普光寺参り」等、教団民の信仰による旅人と共に物資の流通も盛んになって来た。

とくに普光寺街道の宿場でもある稲荷山は京・大阪・西国からの普光寺参りの旅人及び近在の物資の集散地として賑わった。享保十八年(七三三)京都祇園より密売繁盛・家内安全・疫病退散の守護神として尾神宮牛頭天王を勧請した。

さらに、天明五年(七八五)庶民の娯楽として牛頭天王祇園神輿を京都より迎えて稲荷山の祇園祭は盛大に行われる



ようになった。

この神輿は破損が甚だしく、文政八年(八二五)再調製したが、弘化四年(八四七)三月二十四日の普光寺地震により稲荷山はそのほとんどが倒壊。四方所からの出火により、天王神輿も焼失してしまった。一八二一年後慶応元年に再調製された神輿が現在の牛頭天王神輿である。

さて、神輿と共に新規に四方を護る神としての四神と、農村部元町として水を用る俱利迦羅竜王(劍竜)が加えられた。

これが稲荷山祇園祭の四神である。この四神は水内郡妻科村(現長野市妻科)彫刻師山崎儀作により四拾圓にて新調された。

四神は四方を護る神とされている。また四季をも表現している。

青竜(東方・春)春になると山川草木は青々と芽吹く季節になる。

朱雀(南方・夏)真つ赤な灼熱の太陽がかんかんと照り続け、

草木も枯れるほどの暑さである。

白虎(西方・秋)太陽の日射しも柔らぎ、朝夕めつさり冷えてくる。早朝の野山は真白に霜で覆われる。

玄武(北方・冬)水の神で亀に蛇が巻きついた姿を現している。

劍竜(水を司る神・俱利迦羅竜王)不動明王の持物の剣に竜が巻きついた状態を表現している。

祇園祭は治田町・上八日町・本八日町・中町・荒町の順に当番町となり、天王神輿はお飯屋へ遷座される。

四神は劍竜と共に当番町の一方所に安置される。

本祭りの当日は、あらかじめ定められた稲荷山全町の被御願路を大神楽が露払いし、四神がそれに続き進んで、治田神社境内の輿庫に納められるが、天王神輿はその後渡御願路に関係無く時間の許す限り練り歩くことができる。

稲荷山 宮澤方巳



白虎と玄武



朱雀



青竜

四神は現在蔵し館に展示されています。

もっと知りたい
ふるさと

17 倉科の観音様
「倉科女に森男・・・」

こんな誰が近辺で昔から使われており、そこから「倉科美人」などとも言われていたが、これは歴史の事実から生まれていたらしい。

その一つ、倉科の石杭に万葉の歌碑が残されている。「比等未奈乃許等波多由登毛波兩思奈能伊思井乃手男我許等奈多延曾林」

奈良時代、九州に派遣されていた防人が詠った歌とされているが、この意味は「こんな遠方の地に来ちゃって懐かしい故郷の誰とも会話が出来なくなっちゃったが、あの埴科の石井にいる可愛い女とだけはもう一度話をしてみたいものだ」となる。

古代日本語で「テコ」とは美女の事を言い、美男子は「ヒコ」と言った。

一つ目として、平安時代の初期、征夷大將軍「坂上田村麿呂」が信濃にやってくる時のことである。

目的は東北遠征であったが、京都出立前に一人の仏師から「この観音像は私の故郷にいた大好きな女性の姿を写した物ですので、この像は必ず故郷の倉科に安置して下さい」と託されたと言う。

それが妙音寺の十二面観音像であり、だからこの観音様は他の観音様と違って、艶っぽい生き生きとした表情をしているのだ。



妙音寺の観音様

この二つの出来事から昔の人は「倉科女・・・」と語っていたと思われる。坂上田村麿呂に関係すると言われる観音堂は信濃三十三番札所の中に八カ所



五番 倉科 妙音寺

あり、波田・穂高・小川・中条、倉科・森・松代東条・保科と続くので、坂上田村麿呂の進軍経路を克明に残している。

ここから同じ作者の彫り物の可能性も考えられるが、おそらく飛騨から野麦街道を通過し、犀川の岸辺を北上して小松原の辺りで南東に進路を変更したと思われる。

そして松代の岩野で千曲川を渡り倉科に到着した。その旧赤坂橋の北側に大日靈貴が鎮座する伊勢社も「大同三年（八〇八年）坂上田村麿呂が・・・」と言われられているから、この可能性は高い。大日靈貴とは天照大神の別

名である。

岩野から峠を越えて倉科と森に観音像を奉安した後、再び峠を越えて東条に行き、保科から嬬恋か淡味を越えて東北へ行った。

これが坂上田村麿呂の信濃通過経路であるが、飛騨から群馬へ行くとすれば上田・真田・嬬恋のルートが一番の近道なのに、なぜ犀川を北上する遠回りの道を選んだのか。

その理由が信濃三十三番札所五番の妙音寺に安置された観音像にあつたとすれば納得できる。

だが、六番の森にある観音寺に千手観音像が奉安された理由は何なのか。それは未だ解明されていない。

歴代 近藤 修



六番 森 観音寺



大河ドラマの撮影に使われた物見櫓や兵舎

平成七年、旧上山田町は、戸倉上山田温泉地の西方山腹「戸倉上山田邑」の広告灯が見える城山の頂上に、中世戦国時代の山城荒砥城跡群（市指定文化財）を、可能な限り史実に基づいて復原して城山史跡公園を造った。

荒砥城は、別名砥沢城とか山田城とも呼ばれ、応仁時代、山田信兼が築いた山城のことである。千曲川流域を上田方面から長野方面まで一望でき、冠着山からの尾根の東端の険峻な断崖、そして北側は切り立った絶壁、下は荒砥沢の要害にして要害なこの地、城山に築かれた戦国初期の模式的な山城である。

もっと知りたい
ふるさと

19

荒砥城跡 城山史跡公園



当時の様子（想像図）

この山城は、本郭・二の郭・三の郭・四の郭とあり、さらに、本郭の背後冠着山方面への尾根づたいに、砦や置城などを配した、複合連郭式の実に堅固な構築である。急峻な斜面に通路を蛇行させて穿き、容易に這い上がれないように石積をし、要害所に門を配した。そして、二の郭には物見櫓・兵舎を置き周囲には石積と柵を施した。本郭には館・兵舎・展望台を築き周囲を石積と柵で固め、その裏には堀割を掘った。また、水路については、永正元（二五〇四）年頃、城腰（天神原）の弁天池から、水路を穿つ

て引いてきた。

この荒砥城を築いた山田氏は、清和源氏信濃村上氏の為の子山田（仲綱）が、山田に分かれて住み、地名の山田を名乗った。山田仲綱は、山田地方を開拓して荘園とし、庄司となつた。そして、文治年間頃はカマヤ（榊屋敷・釜屋）に居館していた。

山田仲綱の子山田為村は、専ら荘園の拡大と文化の進展に活躍した。例えば十二面観音を古屋から移遷し氏寺とし、宇佐八幡を氏神として拝した。そして、建久八（一一九七）年、源頼朝善光寺参詣の折、その活躍忠勤を賞賛され守護不入の大特典を賜った。

山田為村の曾孫山田信兼は応仁時代（一四六七～一四六八）に城山に荒砥城を築城し釜屋から城腰に移った。そして、波岡科神社もハベシナ神から現在地城腰へ移遷した。

天文の初（一五三二）年頃、葛尾城主村上頼国は、武田軍の進出に備えて、小泉郡神科村戸石に戸石城を構えた。これを継いだ村上義清は、荒砥



城山史跡公園案内図

城主の山田国政及び吾妻清純に城代として守備をさせた。ところが、天文二十（一五五二）年五月二十六日、武田方の真田幸隆に戸石城を急襲され、城代山田国政と吾妻清純の二将は奮闘及ばず戦死してしまつた。

そこで、荒砥城は、山田国政の子豊後守山田国継が継いだ。だが、天文二十二（一五五三）年四月五日武田勢に攻められ、荒砥城は遂に落とされてしまつた。続いて葛尾城も同四月九日に陥落した。

この城山史跡公園は、近年、NHKの大河ドラマ「風林火山」・「江」などのロケに使われ、観光のスポットになったりしている。

鎌原 賢司

もっと知りたいふるさと

20

地図に載った冠着山(姨捨山)と 塚田雅丈翁

まやたけ

平安時代延喜五年(九〇五)「古今和歌集」に、「我が心慰めかねつさらしなや姨捨山に照る月を見て」の歌に、初めて姨捨山と月が登場する。天曆十年(九五六)「大和物語」は「姨捨山」の由緒を説いている。嘉承元年(一一〇六)「今昔物語」の終文に「...それよりなむ姨捨山とぞ言ひける...」その前に冠山とぞ言ひける。冠山の中子に似たりける、とぞ語り伝へるとや」と結ぶ。冠山の別説に、手力男命が天の岩戸を運ぶ途中、この山で「休みして、冠

後、その弟子たちや寺僧の宣伝活動で姨捨山の称が冠着山から長楽寺辺りに移っていった。羽尾の月の井酒蔵、塚田雅丈(戸長・村長、県会議員を歴任)は、その誤りの是正を広く世に訴え、明治二十二年三月九日「長野新聞」三〇三八〜三〇三九号に「実ノ姨捨山」と題して「実ノ姨捨山は冠着山」であり、長楽寺周辺は後世の付会であると論説。また、同紙四三九八号に「姨捨山所在ノ誤ヲ矯正ス」と広告を出した。これに呼応した明

を付け直した戸隠伝説から呼ばれたと言う。江戸時代には冠木岳(冠力岳)と呼ばれ、佐久間象山は天竺山と歌った。寛文六年(一六六六)仙石区有の「寛文永鏡」に「冠着山」の称が初めて登場する。



明治43年測図。大正3年発行した日本の国土地理院の地図。実際は明治27年測図の地図に冠着山(姨捨山)と記載されたといわれている。

大島浮名は塚田雅丈の姨捨冠着山復権運動に賛同し、おおいに支えになった人物である。彼は加賀藩百万石支藩である大聖寺出身の藩士で、塚田雅丈とともに発起人となり、明治二十四年八月から二十六年七月にかけて、冠着山の頂上に、月読命の社殿と輝嶺山に里宮である観月殿を建設している。これは、羽尾二百戸の助力を得て、輝嶺山の山林伐採整備を行い、更に冠着山道改修工事で愚問から頂上まで完成した。この事業の経費を工面するために、浮名は「趣意書」を全国の賛同者に出し、協力を募集した。

明治二十七年から日本国の地図作りが始まる。塚田雅丈はいち早くこの情報を聞き「冠着山は姨捨山」であることを働きかける。実際は復権運動の後半明治二十六年以降より働きかけ、大日本帝国陸地測量部発行の地図に、冠着山は別名「姨捨山」と記載することができた。これにより、姨捨冠着山の復権は成功した。そして、後の世まで語り継がれるように「姨捨山冠着宮通押所の碑」を明治二十七年、稲荷山荒町・坂城町町原榎木坂・麻績村上町ガッターの三か所に建てた。また、ともに大業を成し遂げた大島浮名夫妻の歌碑を大正五年高輪で没した後、塚田雅丈が輝嶺山に建立する。そして、雅丈本人の顕彰の碑「姨捨山之碑」を大正七年建元有志により建立する。その後、塚田雅丈は大正十一年七十五歳をもって世を去った。

戸倉史談会 大橋静雄



姨捨冠着山の頂上に建てる月読命(月読神社)の聖宮と月見殿を輝嶺山(山)に建設したのは塚田雅丈が建てた大島浮名の彫刻。①は塚田雅丈の顕彰碑。②は塚田雅丈の顕彰碑。